

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

アメリカ ワシントン補習校 校長 森 宏介

目次

- ① 学校の規模や子どもたちの実態
- ② 現地の新型コロナウイルス事情
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯
- ④ 実際の取り組み
- ⑤ 苦勞した（している）こと
- ⑥ 喜びを感じた（感じている）こと
- ⑦ 今後への課題

①学校の規模や子どもたちの実態

- ワシントンD.C.と隣接するメリーランド、バージニア両州に住む児童・生徒が通う学校。
- 4月当初の児童・生徒数は約600名。幼稚部と高等部を併設していることに加え、どの学部も1日6時間の授業を実施。
- 社会科や実験を伴う理科の授業、合科としての音楽や体育などを実施していることも特徴のひとつ。
- サッカーや合唱、箏、書道、ダンス等の放課後活動も盛んで、朝早くから午後6時ごろまで子供たちの声が響き笑顔が満ち溢れている。
- 本校の児童生徒の約半数は、日本に住んだ経験をもたず、3分の2程の家庭は、帰国予定が定まっていない。
- 国際結婚の家庭も多く、家庭内コミュニケーション言語は英語と日本語が拮抗している。家庭環境の違いは日本語力の差に直結。小学部高学年からその差がはっきりと見られるようになり、中学部以上においてはかなり顕著な差が生じている。

② 現地の新型コロナウイルス事情

- 2月は感染者ゼロが続いていたが、3月7日に初の感染者が確認されると状況は急激に悪化。
- 3月16日、トランプ大統領は当地で初めての死亡者が出たことを受け、学校の休校、10人以上の集会を避けること、旅行やバー・レストラン等での飲食を避けること等を盛り込んだ対応指針を発表。
- 事態の進行に呼応するように、違反者には5000米ドル以下の罰金、1年以下の禁固刑またはその両方が課せられる外出禁止令（Stay at home order）が出された。2020年5月現在もその影響下にある。
- ワシントンD.C.とメリーランド、バージニア両州人口の合計は、東京都のそれにほぼ匹敵。5月14日時点で比べると、東京の犠牲者数は212人（1万人あたり0.15人）、こちらは2971人（1万人あたり1.94人）と、新型コロナウイルスの犠牲者が日本の10倍をはるかに超える深刻な状況。
- これを受けて実施した全校アンケート調査によると、在校生の約9割は、普段と変わらない生活を送っているものの、現地校のオンライン授業の負担や外出できないストレス等が影響し学習意欲の低下などの見せる子どもも現れている。また、保護者の中には仕事を失う方も現れ、夫婦共にレイオフされ収入の途が閉ざされている家庭もある。

③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければ いけなくなった経緯

- 3月上旬、学校所在地のメリーランド州は、緊急事態宣言を発令。
- 中旬には、このエリアを管轄する教育委員会が全公立学校の休校を決定したため、本校は卒業式を実施することなく年度を閉じることとなった。
- その最中に出された外出禁止令により、派遣教員並びに事務局員は出勤することができなくなり、以来、テレワークで日々の業務をこなしている。
- また、現地校は、8月まで学校を閉じることになったため、本校も同様に休校措置をとることを決めると同時に、何らかの対応策の検討を余儀なくされた。

④ 実際の取り組み

- 新たな事を進めていくためには、教職員の協力が不可欠であるため、学校運営委員会に対処策を具申する前に、その可能性を探るためのアンケートを実施。
- その結果、全教員が「オンライン授業に協力する」と回答。
- 自信の程をたずねる問いにも、「自信がある」と答えた教員が3分の1、「自信はないがやってみる」を含めると、8割を超える教員が前を向いていることがわかった。
- これを受け、4月11日の学校運営委員会で「オンライン方式」を提案。
- 様々な議論を経て、4月25日の開校を目指して準備を整えることになった。

- オンライン授業を実現するためには、少なくとも以下の3つの課題を乗り越える必要があった。

(1) 期間中の学習計画や授業方法、時間割を定めること。

(2) ICT機器の扱いに不慣れな教員に対する研修の実施。

⇒ 方針決定の夜、校長から職員に決定事項に加え、かねてより温めていた授業方法等を伝達。

翌日には職員研修を実施するとともに、学年ごとの会議を開き、教員の不安解消に努めた。

それと並行して保護者向け説明会の準備を開始。主要な教員の協力を得ながら、説明会の目玉となる「模擬授業ビデオ」作成にとりかかった。(そのすべてをオンラインで実施)

(3) 教師と生徒、双方向のやりとりを可能にするプラットフォームの選定。

⇒ 「授業の質は？」 「セキュリティは確保できるの？」等の疑念や心配を払拭するためには、保護者への十分な説明が必要。それまでの準備期間はわずか1週間。スピード勝負だった。

- 「数百人が集う説明会が果たして可能なのか」「関心をもってもらえるだろうか」当初は、そのような不安を抱いていたが、結果は大成功。
- 全家庭の約9割に当たる435家庭に参加していただくことができたこと、初回オンライン授業参加者が全生徒の97%であったことから、期待の大きさをうかがい知ることができた。
- 最終的に、2回のお試し期間の後、保護者の皆様にオンライン授業に参加するかどうかを選択していただいた。
- 管理運営委員会が実施した事前アンケートによると、「オンライン授業に参加したい」と答えた方は、全体の約65%（約380名）だったが、実際にふたを開けてみると全体の9割を超える550名の方がオンライン授業で学び続けるという選択をしてくださった。先生方や事務局スタッフの努力の結果であると受け取っている。

⑤ 苦勞した（している）こと

- テレワーク開始時は、意思疎通の困難さに直面した。
- 言葉を交わせば短時間で済む確認事項もメールだと数倍の時間を要する。
- オンラインで実施する教員研修も、周到な準備が必要。
それなりの段取りをふみ準備万端整えていたつもりでも、我が意が他者に伝わらないもどかしさを感じる事ばかり。
- 込み入った話は電話を使うこと、効率的に遠隔会議を設定し双方向でやりとりをしながら合意形成をしていくことなどした結果、問題点は少しずつ解消していった。

- また、本校は、ZOOMを使ったオンライン授業を想定していたが、当時ZOOMは、不適切な画像表示や授業妨害等、ZOOM BOMBINGと呼ばれるハッキング行為の標的となっていた。
- 「ニューヨーク州では使用禁止に」や、「FBIが警告を発した」という事実が盛んに報道されていたため、保護者からは「ZOOMを使うのであれば参加しない」という声も寄せられた。
- また、教員からは「使いにくいのでGoogle Meetを使わせてほしい」という要請も届けられた。
- そのため、できる限りのセキュリティ対策を施すとともに、使い勝手の良さアピールすることが必要だった。

- ちなみに、本校では、
 - ・ 会議URLを表示しない
 - ・ 招待コードとパスワードを別々に知らせる
 - ・ 入室の際、本校の児童・生徒であることを確認するために「学級名＋漢字表記の本名」で入室することを求めるといったことに加え、ZOOM-BOMBINGを防止するために、
 - ・ 外部への情報提供厳禁
 - ・ 録画・バーチャル背景の使用禁止などの細かなルールを定め、指導の徹底を図っている。
- このような強固なセキュリティ対策を実施できたのは、IT技術に長けた事務局員と保護者ITサポートの方々のご協力があったればこそと感謝している。

- 今回、最も困った点は、外出禁止令の下、児童・生徒に教科書や副教材を渡す手段を閉ざされてしまったこと。
- 州政府の許可をとりつけ、ドライブスルー方式で配布するという計画をたてたが、実行直前に、運営委員や事務局員から心配の声が上がったため、計画は中止になり、最終的には郵送することで問題を解決することにした。
- 600人以上の児童・生徒に教科書等のパッケージを準備し、住所を記したラベルを貼り、郵便局に持ち込んで発送するという作業に、3週間ほどの時間を要することに。その費用も100万円を超える額に上った。

⑥ 喜びを感じた（感じている）こと

- 外出禁止令は、
児童・生徒にとっては「学習機会喪失の危機」
教師にとっては「雇用喪失の危機」
学校にとっては「存続の危機」をもたらした。
- しかし、これは見方を変えると、
児童・生徒にとっては「自学の習慣を身につける機会」
教師にとっては「ICT機器を駆使した授業技術を習得する絶好のチャンス」
学校にとっては「新たな可能性に挑戦する契機」と考えることもできる。
- 振り返ってみれば、
「外出禁止令が出なければ、オンライン授業の可能性について考える事もなかったであろう」と思われるし、
「コロナウイルスによる学校存続の危機をチャンスに変えることができた」という喜びを感じている。

- 保護者の皆様からいただいた多くの喜びの声を3つほど紹介したい。
- 「先生の授業はとても周到にご準備頂いていることが大変よく分かり、また、授業の進め方も復習を交え、生徒の理解をご確認頂きながら、各生徒の自信度を踏まえて、プレッシャーなく行って下さり、その効果的な2時間に大変感心いたしました。
先生-クラスメイト間の授業に臨んでいる空気も明るく、配慮に溢れ、大変よいものだと思います。
また更に夕方には必要な生徒のために質問時間も設けてくださっているとのこと。
この恵まれた環境をかなえて下さった先生、日本語学校に感謝です。
(現地校もここまでやってくれたら、と思います！素晴らしいです)」

- 「本日、日本語学校の教材をいただきました。このような状況のなか、何百冊もの教材をどのように事務局の皆様が梱包し、郵送してくださっているのだろうと想像しただけで もう本当に胸がいっぱいになりました。心より感謝申し上げます。オンラインでの先生方のご準備も完璧で、親も子供たちもわかりやすい内容でお知らせいただいております。明日からの授業、親子ともども楽しみにしております。まずは御礼をと思いました。今度もどうぞよろしく願いいたします。」
- 「教材も1ページ1ページをスキャンしてPDF化していただいて、あああ、これ何時間かかったのかしらと思っておりました。自宅でプリントアウトできるのですから、それだけでもありがたいのに郵送までしていただき、感謝しかないです。なので来週からもどうかご無理をなさらず・・・！！校舎での授業ができないのは残念ですが、充分すぎるほどの環境を作ってください、これはもう出席する子供たちも親も頑張るしかないですね。毎週土曜日が楽しみです。」
- このような感謝や励ましの言葉をいただくことほど嬉しいことはない。

⑦ 今後への課題

- 課題について述べる前に、本校がオンライン学習の準備を短期間で終え、無理なく実践に移すことができたわけを紹介する。
- 本校は、5年前、3校体制であった学校を1校に統合した。その結果、多くの生徒を収容することが可能な学校に移り、授業を始めたが、その学校（現在の借用校）には黒板がない。
- そのため、先生方は、デジタル教科書とアクティブボードを使った授業に移行せざるを得ず、現在では、全ての教員が授業の道具としてのパソコンを使いこなしている。
- また、中学部以上の生徒一人一人には、本校のアカウントを与え、ネットワーク機能を活用した課題の共有や解決など、ICT機器を利用した授業を行っていた。このような学習は必ずしも対面で行う必要がないものである。
- 私は、今回の経験を通して「オンライン授業を実施する前提として教師も生徒もICT機器を活用した授業に習熟していることが必要である」ことを学んだ。

- 最後に今後の課題について触れたい。
- 今回の事態の一番厄介な点は、収束時期が全く見えないこと。
8月下旬の対面授業開始をターゲットに準備を重ねていくつもりだが、
そもそも、確実に開校できる保証などない。
また、首尾よく開校にこぎつけたとしても、通常の授業の実施は難しい
と見ておくべき。
- アメリカ疾病予防管理センター（CDC）は、学校再開にあたって、6フィート
以上の間隔を空けての着席や食堂や運動場などの共用施設の閉鎖などを求めている。
そうであれば、1学級あたりの生徒数を半分にし、二部制で授業を実施
することも考えねばならない。
- また、同センターは、遠足、集団活動、教育課程外活動の中止や制限も求めている。
そうすると、学校行事の変更も必要。
- 加えて、第2波、第3波が襲って来る可能性も視野に入れておかねばならない。
- これまでは、事態のフェーズが上がるたびに振り回され、対応を変更すると
いうことをくり返して来たが、今後は、基本線をしっかりと定めたとうえで、
次に起きることを予測し、対応可能な様々な複数の実施案をもっておくことが
必要だと感じている。